



ニジマス
 分類 ニシン目 サケ科
 学名 *Salmo gairdnerii iridens*
 英名 Rainbow trout

ニジマスは体長15cm以上になると雄雌共に体側中央の側線部に、幅の広い赤紫色の縦帯が見られるが、産卵期の雄は特に顕著である。この赤紫色の縦帯と、腹面をのぞく体全体に小さな黒点があり、特に尾鱗の黒点は他のサケ科のものと同様に分類識別するときに大いに役立つ。ニジマスは「虹鱒」で、ベニマス「紅鱒」と漢字の類似から混同され易いので注意が肝要である。

ニジマスは元々北アメリカ・カリフォルニア州のロッキー山系の溪谷に陸封されたRainbow troutで、日本には明治10年頃から種卵が輸入されて日本全土に広まり、各地で養殖が盛んに行われている。北海道へは比較のおそく大正6年日光の中禅寺湖から移殖された。ヤマメもイワナも同じように溪流に生息するサケ科の魚で、在来のマスと呼ばれ、これに対しニジマスは舶来マスと呼ぶ事がある。

ニジマスの養殖は水温15℃前後の清澄なる清水が必要であるため、日本有数の養魚場は長野県の穂高地方、静岡県富士宮市、滋賀県の醒が井等山麓地方が有名である。ここでは川の水を取り入れている養魚場もあるが、ほぼ水温の一定している豊富な地下水を汲みあげているところが多い。ニジマスは他の魚類に比較して酸素の要求量が非常に高く、止水即ち単なる池での養殖では斃死することが多いので、池に高低の差をつけて水を落させ曝気(バッキ)により少しでも空気中の酸素を溶解させ、酸素を充分に与えるのみならず、水が流れることにより魚が運動し、病原菌の予防、健康に有利なように設計されている。

ニジマスの採卵、孵化は人工的に行われる。12月の寒気厳しいころ雌の腹をおさえるとオレンジ色の卵が採卵

盆の中へほとぼしるとき、時をわかたず雄の精液をふりかけ羽毛で軽くかきませ水へ移す。約30日位で孵化し稚魚は体側に8〜12ヶの小判形のパール・マーク(Parr mark)が見られるが、体長15cm位になると消失しニジマスの大きな特徴となっている赤紫色の縦帯が見られるようになる。

ウナギやコイ等の温水性の淡水魚と異り、ニジマスは冷水性で冬眠とよばれる期間がなく、冬の間でも盛んに餌をとり、どんどん生長するため、孵化して1年位で20cm、2年すると40cm、1kgの体重になるほど成長も早い。大きなものでは体長75cm、体重8kgのものが見られる。

南米ボリビアのチチカカ湖に移殖されたニジマスは100cmを超え、雄の鼻先はサケと同様に曲っているものが見られるという。

以前はイワシやサバ等をミンチにかけ小麦粉や米ぬかを混ぜ合わせた自家製の飼料を使っていたが、現在ではスケソオダラ等を粉末にしたフィッシュミールに澱粉や各種の栄養剤を混入した配合飼料が用いられている。

ビタミンB₁・B₂が不足すると成長停止、神経過敏になりやすく、ビタミンAが不足すると病原菌に抵抗がなくなり、目玉がとび出してくる。その他ビタミンD、E、パントテン酸等が必要で人間並以上である。

観光地ではアユの代用品として姿焼きのままメニューに加えられ、町内の魚屋、スーパーマーケットにも大分出廻り一般に馴染み深くなってきたので小型の方が(1尾100g程度)評価されがちであるが、活魚が手に入るところでは1kg以上のものをアライや土佐作りにして利用されるが、たしかに脂ものり且又淡白で美味である。

ニジマス

分類 : ニシン目 サケ科
 学名 : *Salmo gairdnerii iridens*
 英名 : Rainbow trout

アメリカが原産地で最も養殖に適したマスで最適水温は9〜18℃で流水、中で飼育する場合も更に高温でも可能である。三年間1.2〜2.0kgに成長するサケ科異例の数年間連続して産卵出来る強味である。稚魚は茶眼卵1日時期は孵化後大量の稚魚輸送が出来る。稚魚は小判形、パールマーク(Parr mark)と呼ばれる暗色斑が体長15cm位で消失する。この時期は本魚の大きな特徴として体側面に赤紫色、美しい縦帯が表れる。地色は黄褐色味が青緑青色で、背鰭、尾鰭、脂鰭が各々1本全体を輪郭、ハツキリした小サナ黒斑が多い。同属のブラウントラウト(*Salmo trutta*)はコノホカ小サナ赤色斑が見られる。ニジマスが陸封型であることは、降海型ニジマスは頭部が銅鉄色でスケールハットトラウト(*Salmo gairdnerii gairdnerii*)が異なる。ニジマスは近年大衆魚として魚屋店頭を並ぶようになった。



アルゼンチン -1974-



ニュージーランド -1960-



北朝鮮 -1965-



マラウイ -1974-



アメリカ -1971-



レバノン -1968-